

飛耳長目

「開頭」昭和30年9月20日発行 第91号8・9合併号
民族のバックボーンについて

森信三

2・3年前のことであつたかと思うが、民族のバックボーンという問題が盛んに論じられたことがあつた。

ところが私の考えでは民族のバックボーンという問題が、あの頃よりも、むしろ現在の方がより重要性を帯びてきつつあるのではないかと思う。というのは、あの頃は我が国がその永い被占領政治からよしなな名目的にもせよ、離脱しようとする前後のことであつたから、一応この問題の取り上げられるべき必要はあつたと言つてよいからである。

ところで現在我々日本民族は、果たして自らのバックボーンを打ち立てていけると言えるだろうか。民族のバックボーンというような問題は今日といえども、必ずしも過ぎ去つた過去の問題でないばかりか、ある意味では、はるかにその重要性を加えてきたと言えるかと思うのである。

1

では何故現在では、二、三年前よりも、かえつてこの問題を究明することの重大さを加えてきたというのであろうか。

端的に言えば、我が国がアメリカによつて加えられつつある圧力が、実質的にはあの頃より、減少するどころか、かえつて増加しつつかつあると言つてよいからである。「ビキニの灰」というものを、当時の我々はまだ知らなかつたし、兵備の増強に対する巧妙なる要請というようなものも、当時の我々のまだ知らざりしところである。このような見えない圧力の鉄鎖は、最近で

はさらに中共貿易という国民的要望の抑圧を中心とする東南アジアの貿易の拘束によつて増強せしめられつつあることは今や国民の大多数が、程度の差こそあれ知らしめられつつあるところである。

このように考えてくるとき、われわれは、民族のバックボーンの問題は数年前に比して、かえつてその意義が加重せられてきつつかつあると言つてよいであろう。換言すれば、数年前もこの問題が、論じられた頃は、いわば、一部少数のインテリ層を対象としたものであつた。しかるに現在では、このことも必要は、そうした一部少数のインテリを対象とするというよりも、国民の大部分を占める庶民階層を対象とするべき段階に到達したと言つてよいであろう。されば私がここに、この問題を取り上げるといふことが、必ずしもいわゆる「季節はずれ」でないことを誌友諸氏よ、乞ひ願わくば諒とせられんことを……。

2

だが、しかし、ここに、この問題を取り上げるのは単にそれだけの理由のみではない。そこには、さらに一つの必要がある。

というのは、私の解する限りにおいては、いわゆる「バックボーン」という言葉によつて呼ばれるものの内容が、多くの国民にとつて、いまだ十分に明確になつていない点があると考えられるからである。なるほどバックボーンという言葉は、一応形式的には人類の背骨をイミするの真語であつて、その程度の理解としては、今日、多少なりとも学校教育を受けたほどの人ならば、知らぬはずはあるまい。だがひとたび我が全有権者の何割が知っているかとなると、

問題はそう樂觀を許さぬかも知れない。

誌友諸氏のうちにすら、私のこのようなわかりきった事柄の叙述、ないしは分析を、はがゆく思われる人があるかとも思うが、私は現在、いやしくも教育とか、思想の一端に触れる者は、このような民族の裁定基盤層の分析から、改めて再出発する必要を痛感しているものである。これを一言で言えば、今日われわれは、かつて明治の初年に、かの福沢諭吉の取組んだような根底的基盤的な一大啓蒙運動を必要とする時期に際会していると思うからである。

この意味において、私は、我が民族の宿命的悲劇は、福沢以後、彼と並ぶほどの偉大なる啓蒙的思想家を持ち得なかつた点にあると思うものであり、何れこの点については一度稿を改めて、所信の一端を披瀝してみたいと考えている。

3

さて話を元に戻すとして、バックボーンという言葉が英語であつて、人間の背骨を意味すること、さらにそれは精神的な脊梁骨をも意味し、人間の主体性を意味することを知っている人は、現在の国民の教養程度ではかなりな数に達していると考えているであらう。

ところが問題は、その内容にあるのである。すなわちそれが民族としての背骨、ないしは主体性を意味するところまでは、相当数の人々が理解しているとしても、一歩踏み込んで、「ではいかなる内容を持つことが、その場合必要な条件であるか」と詰め寄せられたとき、これに対して即答し得る人は、意外に少ないのではない。それは予想以上に少ないかもしれない。

そもそも我々人間は、重大な問題に対しては、

足下に即答できることが望ましいと思う。だが、現実には、重大な問題ほど、即答を困難とするのが常である。これは一体どこにその原因があるのだろうか。そもそも即答ができるということは、それが自明の事柄でない限りは、平素その問題に対して、自分は自分なりに、一応の見解を持つところまで考えているのでなければ、不可能なことである。少なくとも平素その問題に対して、心中秘かに取組んでいるのでなければ不可能という他ない。

しかるに私の考えでは、民族のバックボーンを形成する内容が、今日いかなるものでなければならぬかということは、ある種の人々にとつては当然自明の事柄であるかもしれないが、一般普通の人々……すなわち思想をその任務とするのではない人々としては、案外即答に困る問題ではないかと思うのである。でもそれはなぜだろうか。

4

そもそも、バックボーンという言葉の意味するところは普通なれば、主体性ということであり、主体性とは自ら立つの謂いである。ところで敗戦前の我々であつたら、バックボーンとか、主体性というものは極めて簡単自明だつたと言つてよい。というのはいま多少の誤解を恐れずに言うとなれば、それは単なる自民族肯定の民族主義でありえたからである。しかるに、この敗戦の悲劇を通過した今日では、問題はそのように単純ではない。けだし昔日の単純素朴なる自己肯定としての民主主義は、敗戦によって潰え去つたからである。

かくして今日において、民族のバックボーンを問題とすることは、単なる古き民族主義の再

建でありえない事は言うまでもない。すなわち今日民族のバックボーンと呼ばれるべきものは、かつての日の素朴なる民族主義的な思想ないし信念が深刻なる敗戦の体験によって否定的に超克せられたものでなければならぬであろう。したがつてそれは単に「自ら立つ」というのではなくて、深刻なる否定を通して「自ら自己を立てる」のでなければならぬ。これは単なる語呂合わせの際会ではなくて、一度倒れたものを新たに建て直す運命を担えるものに不可避な荆棘の道と言わねばならぬ。

5

いま民族のバックボーンの意味をこのように解するとき、そこに必然に考えられるのはかつての日の素朴なる民族主義を否定的に研究するために要とせられる媒介的思想である。このような媒介的思想……それはその本質においては、旧き民族主義を否定すべき意味を持つものでなければならぬが……を欠くとき、如何にバックボーンと言つてみても、それは結局は戦前の素朴なる民族主義への逆転に他ならず、しかもそれは一度敗戦によって現実的否定を受けた以上、今日となつては戦前ほどの力を持ち得ぬものだということを知らねばならぬ。

ではここに素朴なる民族主義を否定的に研究するところの媒介的思想は何であろうか。それには一応二つの思想が考えられる。一つは民族主義的ヒューマニズムである。いま一つはマルキシズムである。そしてこれらの二つは、我らの民族が、敗戦に至るまで本質的には……少なくとも民族の素朴なる背骨に滲透するまでには受容れなかつたものであり、特に後者につい

ては徹底的に斯く言うことができると思う。

しかも注意を要する点は以上の理由によって、我々日本民族としては、今日これらの二種の思想によって、それぞれの程度において、思想的洗礼を受けねばならぬと思われるが、しかもそのうち前者の必要については、大部分の人々がこれを認めても、後者の必要性ないしは必然性については、これを確認している人々は、これを民族全体の比率から見たならば、今日なお意外に少ないのではあるまいか。しかも私の考えるところでは、今日民族のバックボーンを打ち建てるには、特に後者の流れを回避すべきでないということである。その故は、現在われわれが現実的に拘束を受けているのは前者の支持国であって、後者に依拠している国ではないという厳たる事実によるのである。したがって単に前者にすなわち民主主義的ヒューマニズムの洗礼を必要とするのみでは、うっかりすると、現在民族の受けつつある現実の重圧を、そのまま甘受し肯定する危険がないとは言えない。現に敗戦直後、さかんにヒューマニズムを振り回した思想家のうちには、この種の人々が少なくないことによってもその点は明らかである。

かくしてわれわれは、今日民主主義的ヒューマニズムについても、民族の肉体にまで浸透せしむべく新たな努力を開始しなければならぬと思うが、同時にそれらに比して、勝るとも劣らぬ努力は、今や民族として社会科学の真理の洗礼を回避してはならぬということであろう。かく言うはもとより社会科学の真理の単なる模写的、公式論的受容をもって民族のバックボーンが立つなどと言うのではない。だが、同時にそれを、民族の血肉化しなければならぬという要

請については、今日国の置かれている現状よりして、決して民主主義的ヒューマニズムに劣るものではないことも、これを認めねばなるまい。

令和の次代に入っても、日本をとりまく環境は、ソ連が中国に代わったのが見新しいが、香港の一国二制度問題で中国全人代が新法律を採択したことで、新たな問題が派生した。アメリカをはじめ世界はコロナ問題で手一杯の現況に今だとばかり中国は懸案を力づくで解決しようとしている。世界の耳目が集まるどころだが、中国に表立って厳しい見解を発表するに至っていない。日本もアメリカの出方を待っている。中国の強引な遣り方を座視する事は、世界が中国を中心に動くことになり、好き勝手に地球を差配することに繋がる。愚生は名ばかりの国連を解体し、新たな国際機関を策定する際に会したと考える。（二繁）

実践発表 本物の教師になりたいという願い二

東井義雄

■「母」の念力

（前号続き）そういう点で私は、この母心とか親とかいうものに学ばなければならぬ気がいたします。ことに母心というものに、強く感じさせられることがあります。もうこれは今年生のチビが5つの時です。冬のみぞれの降っている日でありましたが、私はメッタにうちにいたことはありませんが、その日はどうしたところか、半日家におりました。ところが、私の義理の母は、大きい方の男の子を連れて、正月札に行っておりました。雪が降り始めたので、長靴を持って長女が迎えに行っていました。家内は婦人会の用事で出かけていきました。あとに残ったのは、私とチビと二人です。始めは絵本を広げて、出たら目の話を聞かしておりました。

いろいろ話をしておりましたが、話の弾みに「お母さんの姿が見えなくなりました」というと、チビが急に「おかあちゃんが、おんさりやへん（いない）」と言い出した。これは悪いことを言ったと思いい、急いで、話の続きをして、お母さんを浮かび上げさせたのですが、もうチビは聞いてくれません。「おかーちゃんがもどりんされへん。おかあちゃんが戻りんされへん」と泣き出してしまいました。そしてもう話をしても振り向いてもくれません。そしてもう話をしても行ってしまうました。「おかあちゃん、おかあちゃん」と泣きながらしきりに呼んでおりました。が、今度はもう諦めたように櫛の柱にもたれて道の方を眺めております。そしてこちらを振り向きましたら、顔いっぱい涙をためて私の顔を見て「おかあちゃんが戻りんされへん」と言っています。どのように言っても聞いてくれません。いい加減に帰ってきたらいいのにな（笑声）そう独り言を言いながら待っております。一向に戻って参りません。子どもは泣き始める。「おかあちゃん、おかあちゃん」泣く。私は「カンシャク」が起きて今度は、むかついてきました。めったにやらんお父ちゃんがおつてやっておるのに、おかあちゃんのどこがいいのか。という（笑声）どっこも（全部）エエです」と泣きながら言います。おかしいこと言うなと思いましたが、「なんでおかあちゃんの方がええのだ」「どうでもおかあちゃんの方がええです。おかあちゃんが戻りんされへん」と言いながら、しくしく泣いております。

私にはわからんけれども、とにかくどっこも（全部）ええらしいんです。私はやはり子供に泣かれながらも、晩まで待っておれば帰ってくるから良いようなものの、もし万一家内が死ん

でしまったということになると、こんなに毎日、背中の上で泣かれながら育てなければならぬのかと思うと、子供のためだけに、もう少し家内を大事にしてやってもいいなと考えました。あたりが暗くなつてから、母親が帰ってきましたが、その顔を見るなり、いっぺんに泣き顔が消えてしまいました。私は家内のどこがいのかなあと思つて見直しました。(笑い声)どこかいいところはありませんが、家内の方は、私の顔を見るなり、「みつちゃんは無事に行つたでしょうか。長靴持っておぼさんのところに、無事に着いたでしょうか」と言いますので、「うん、着いとるわい」とか言っていました。しばらくするとまた、同じようなことを聞きます。

「うん、行つとるわい」と私は言つておりました。そのうち夕飯の支度が出来、私は食卓に向つたのですが、また「それでも無事に行つとるでしょうか」という。「無事に行つとるわい」「心配せんでもええ」と私は、のんきに言つておりましたが、そこではハツとしてわかつたことは、そんなことを思つたところで、その思いが子供に届く気遣いはありません。思つたことが何かの役に立つとも思われません。しかし思つたことが役に立つと、立つまいが、届こうが届くまいが、そんな事は問題ではありません。とにかく思はずにはおれないという、それが母親というものの偉さではなからうか。私には、これがないから、背中のチビが泣くのではないだろうかと、そういうことがわかつたような気持ちがありました。

子供というものは、そういう念力の上に、本物の上に、育つていくんだと思います。

■教師にも「念力」を

アヒルの子は親に温まれたものは、水に入るとすぐに浮かび上がってくるのでありますけれども、機械で温められたものは、水の中に放り込むと浮かび上がってきません。こういうことが書物に書いてありましたが、本当か嘘か、私にはまだはっきりわかりませんけれども、なんだかそういうことがありそうに思われてなりません。そうしますと、私たちの教室の中にも、また学校の中にも、我々教師の念力がぜひ必要だということも思われてまいります。念力・愛・慈悲、これが、モノに生命を付与し、もの価値打ちをひっくり返す、言い替えれば、転換する、これによつて子どもが育ち、村が生き、国が身動きを始める。森信三先生の話にもあつたと思ひますが、小谷純一氏の書きました「愛農教団の書」を読みますと、働くと云うものは、愛の実践だと書いてあります。

私は今の生活綴方について、一つだけ、一つだけと申しませんが、問題点があるように思います。この問題点を解決してくれるのは、この県では小西健二郎さんではないかと期待しておりますが、それは生活綴方に現れてくる、どう言いますか、一種の暗さであります。私も生活綴方の道をたどってきた一人ですから、生活綴り方の正しさは分かるのですが、先年からの暗さが気になつているのであります。それでその暗さを追求していつてみますと、どうも「憎しみの思想体系」にぶち当たつてくるのです。憎しみは反生命的なものです。ものから命を奪うものです。生かすもの育てるものではありません。

姑さんが家に帰ってくる。そこにお嫁さんが寝転んでいる、とそれを見たときに、「年寄り

にえらい目をさせておいて、横着なものだ」と思う。森先生の「眼」の問題であるかと思ひますが、憎しみの「眼」であります。自分の娘が寝転んでおつたならば、「お前どこか悪いんではないか」と言つてみる。それは今私が申しかけているところの私の「眼」では「慈」という事に当たると思ひます。これすなわち「慈悲」の「眼」であります。これが私の家のチビの母親の思いでもあつておられます。これに対してマルキシズムの「眼」には憎しみがあつたと思うのですが、これに通じるものが「生活綴方」にもある。私はこの憎しみの「眼」が何とかならないだろうかと思ひます。これが何とかならない限り持つている者と持たない者の区別のない世界ができたとしても、私たちの世界には、幸せは来ないのではないかと思ひます。(「開頭」89号6・7月合併号)

あとがきに替えて

東井義雄先生の仏教観は興味深い。教師も「母」の持つ「念力」を醸成すべく、精神的に大きく成長して、居並ぶ未来の国の宝を育てないといけない。かつての貧しい教員体験を反省しつつ、誌友諸兄は、特に教壇に立つ誌友諸兄は研鑽を積んでほしいと希うばかりだ。(30日二繁)

〒633-0003
 桜井市朝倉台東2-538-89
 電話 0744-4513422
 Email: hji3@ken.jp
 http://web1.ken.jp/syushn